むかしをとこありけり／そのをとこみをえうなきものにおもひなして／きやうにはあらし／あつまのかたにすむへきくにもとめに／とてゆきけり／もとよりともとするひと／ひとりふたりしてゆきけり／みちしれるひともなくて／まとひゆきけり／みかはのくにやつはしといふところにいたりぬ／そこをやつはしといひけるは／みつゆくかはのくもてなれは／はしをやつわたせるによりてなむ／やつはしといひける

昔、男がいたそうだ。／その男は、自分を無用のものだと思いこんで、／「京にはおるまい。／東国の方に住みよい国を探しに行こう。」／と思って旅に行ったそうだ。／以前から友とする人を、／一人二人連れて行ったそうだ。／道を知っている人もなくて、／迷いながら行ったそうだ。／三河の国八橋というところに着いた。／そこを八橋と言ったのは、／水の流れる川が、蜘蛛の足のようになっているので、／橋を八本渡したことによって、／八橋と言うそうだ。

そのさはのほとりのきのかけにおりゐて／かれいひくひけり／そのさはにかきつはた／いとおもしろくさきたり／それをみてあるひとのいはく／かきつはたといふいつもしを／くのかみにすゑて／たひのこころをよめ／といひけれはよめる／からころも／きつつなれにし／つましあれは／はるはるきぬる／たひをしそおもふ／とよめりけれは／みなひと／かれいひのうへになみたおとして／ほとひにけり

その沢のほとりの木の陰に下りて座って、／乾飯を食べたそうだ。／

その沢にかきつばたが／とてもきれいに咲いていた。／

それを見て、ある人が言うことには、／「『かきつばた』という五文字を／各句の初めに据えて／旅の心を詠んでくれ。」／と言ったので、このように詠んだ。／

唐衣を／着続けてよれよれになった／褄があるので、／張りながら着てきたなぁ。／これまでの旅をこんなふうに感じた。／

と詠み終えたので、／みんなは、／乾飯の上に涙を落として／乾飯がふやけてしまった。